数字に拘る僕

小倉　一純

五十歳を過ぎてから自分の発達障害が分かった僕である。

それまで、精神科にいっときお世話になったことがあったものの、自分が障害者であるという意識を、明確に持ったことはなかった。

人生の後半で急に障害者となるのであれば、最初からそれと分かっていた方がよほど楽だと僕は思う。

自宅近くに身体障害者の集う施設があるのだが、以前、彼らと少し触れ合う機会があった。生まれながらそういう立場で育った彼らには、いわゆる健常者にはない、強さというのか、生き抜くための強烈なパワーみたいなものが備わっている。

さて、自覚がないとはいえ、生来の発達障害であった僕は、数字への拘りに、半端ではない情熱を持っていた。

例えば、小学生だった頃、答案用紙が戻って来た時に、粗点が八十九点であると二、三日は気に病んでしまう。九十点以上なら自分

的にはＯＫなのだ。九十点と九十一点の違いは一点だが、八十九点と九十点の違いは、例えば、僕の場合十万点もあった。

僕の父は、日本電信電話公社（現ＮＴＴ）に勤めていた。父がその中間管理職だった当時、東京の五反田には、「関東逓信（ていしん）病院」という大きな病院があった。その頃は東洋一の大病院といわれていた。現・ＮＴＴ東日本関東病院のことである。

父はいっとき、その病院の労務人事に関わる部署に就いていたことがあり、小学生の僕によくこんなことをいった。

「三十代前半の、若いお医者さんの月給だけどね、課長であるお父さんのボーナスと同じぐらいなんだよ」

子供心にも、世の中は不平等であることを知った。役人である父の給料がそもそも安かったわけであるが。民間でも、運送業とか印刷業などは、同じ大企業であっても、製造業などに比べると、一段低い賃金だった。商

社などと比べればその差はさらに歴然だ。

当時は経済が右肩上がりの時代で、父は役所勤めの傍ら株式投資も行っていた。安月給ながら少しでも早く一戸建てを持ちたいという希望を叶えるためだった。そんな我家には、当然のことながら、東洋経済の「会社四季報」やそれに類する本が数多く置いてあった。僕も、知らぬうちに愛読者になっていた。

その中で給料がバカ高い会社といえば、やはり「アラ石」だろうか。「アラビヤ石油」のことだ。この会社、アバウトにいえば、中東に油田を持っていたから、その利益率たるや半端ではなかった。

アラ石の本社は、当時日比谷の帝国ホテルの向いに本社を構えていた電々公社と同じビルに入っていた。東芝の本社も同じ建物だった。つまり、三社の従業員が同じ所で働いていたのである。

子供心に、アラ石の社員はものすごく金持ちなんだろうな、と思っていたから、

「アラ石の人は昼休み、社員食堂で、どんなものを食べてるの？」

何度も同じことを父に聞いたものだった。

「皆、同じだよ」

電々本社ビルには、四階だったかに、同じビルで働く人のための、いわゆる社員食堂があった。

「じゃ、給料は、アラ石、東芝、電々公社の順なんだね」

「まっ、そういうことだね」

「電々は役所だから、やっぱり、一番給料が安いね」

まったく妙な子供だった。いくら数字に拘りが強いからといって、小学生の頃からそんなことばかりいっていては将来が思いやられる。

後年、僕自身が社会人となってからも同じようなことがあった。

三十歳を少し回った頃、僕はＳＭＣという精密機械の会社に勤務していた。当時、世の

中は狂乱のバブル景気で、僕ほどのノータリンでも、一回のボーナスは三桁の数字になっていた。

その後、三十代も半ば近くなった頃、今度は、産業ガスの会社に転職をした。

現在の、日本エア・リキードだ。ボーナスは一気に七十万円を割るくらいまで下がった。

実はこの会社、本部がパリにある外資系である。そのパリの本社から時々、研修目的で、若い男性社員が日本にやって来ることがあった。

そんな彼らが手に持つ、横に細長い給料明細を覗き見ると、なんと九十万円と書いてあるではないか。僕のボーナスより高い月給だった。

人生を金で判断してはいけないのだろうが、この時、僕はそんな外資系企業で働いているのが嫌になった。その後、僕は、にわか国粋主義者となった。

日本人は、社交の場では、あまり金の話を

しないようだが、やはり、給料の多い少ないは、僕にとっては、重要な問題だった。

そこで僕は一計を案じた。

なまじ給料というものをもらうからこそ、安いの高いのと、拘りを持つのではないだろうか。

それであれば、いっそのこと、社会貢献として仕事をすればいいのである。

昭和の言葉を借りれば、「手弁当」で働くということだ。

そうすれば、同僚の給料と自分のを見比べて、「おかしいッ！」と矛盾点を見つけてしまうこともない。

えッ、なんだって!?

「それじゃ飯が喰えないじゃないかって」

それに対し、僕はこんな風に思うのだ。

「あんた、なに甘いことといってるんだ。金ぐらい自分で稼げッ」

そんなわけで、僕は今も「会社四季報」の愛読者である。